

西洋哲学の酵素としてのキリスト教

ガンゴルフ・シュリンプ

丸山真男が一九五七年に出版した『日本の思想』という論文の中で、「日本には思想の伝統の展開はなかった」と言っているが、「思想の伝統」という言葉を使っているのはヨーロッパの思想の展開、即ち西洋における哲学の歴史、が彼の頭にあつたからである。その歴史とは丸山によれば三つの形式的な特徴を持っている。不変の命題が出発点でありその対象である、あるいは少なくとも論及点である。

— その展開は連続的である。即ち展開の次段階が前段階の結果から推測できる。

— 従つて展開する各段階がそれ以前の全段階を含んでいる。ゆえに、展開の全過程はそこで獲得した思想の蓄積であるという特徴を持ちうる。

丸山真男は、これと逆に、断片的であるところが日本の伝統的

な思想の特徴であると指摘する。儒教、仏教、神道のどれにも、それぞれ異なるものではあるが思想対象は確かにあつて、それは互いに共生しつつ形成されてきたのである。しかし、同質の内容を持つものとしてそこから思想の伝統が生まれ展開することはなかった。その結果、伝統的な日本の思想には、おのおのの現在において過去を包含するということがないと丸山は言う。その基本パターンは次のようなものになる。日本の思想は、日本人の集合的記憶の中にそれぞれ脈絡のないままに蓄積されてきた思想の貯蔵所から、日本のある時期に優勢な集団的感情に基づいて、その時代の感情に特に良く適合するものを選び出すというのである。しかし、その選ばれた思想と、日本人の集合的記憶にある他の思想との調和を、少なくとも一つの重要な点に關して、図ろうとする努力はなされなかった。そのうえ、伝統的な日本の思考では、

その選ばれた思想が過去に日本の歴史においてどのような役割を果たしてきたかを意識しない。丸山は、こういう日本の思想の特性を、歴史的脈絡に関係なく共存するものとし、その意味では日本人の集合的記憶から消えることのない諸思想の再編成であると言う。

丸山の主張から、彼がヨーロッパ思想史の権威であることがわかる。彼は、ヨーロッパ思想史の特徴である形式的要因を認識し、正しく命名している。しかし彼は、その起源、必要性、必要性からくるその影響を示していない。本論文の目的は、ヨーロッパ人にとっても大変有益である丸山の貢献を完成させることにあり、そのために次の四点について論ずる。

- 古代後期のキリスト教と哲学
- カロリング帝国のキリスト教と修道院制
- 中世の学問世界とキリスト教
- 近世哲学とキリスト教

1 古代後期のキリスト教と哲学

フランスの中世哲学史の大家エティエンヌ・ギユソンが一九五五年に出版した『中世キリスト教哲学史』は、まもなく中世哲学の入門書となった。ギユソンが、意識して「中世哲学史」ではなく上記の表題をつけたことは、序文の次の部分に言われている。

事実、一四世紀に涉って哲学がキリスト教を存続させたので

はなく、キリスト教が哲学を消滅させなかったのだ。

従って、ギユソンによれば、キリスト教哲学史は、次のような歴史的事実で始まる。即ち、キリスト教はギリシャ・ローマ社会の脈絡上に成長し、ギリシャ思想とローマ的国家概念によって、……当初は確かに意図的でも意識的でもなかったものの……、どのような社会においても実現されなければならない文化機能へと形成された。しかし、古代社会がその実現のための確実な制度と一般的容認をもはや持っていなかった。即ち、私が言っているのは、宗教が果たす精神的な役割のことであって、それは社会に対して、独自の存在として自己を理解することを可能にし、またその宗教の中に正しい人間観を持っていると確信させるものである。あるいは少なくとも、自分の属する社会と時折接触のある諸社会が掲げる人間観の凡てより優れた人間観を持っていると確信させるものである。そのような観念に基づいて、社会は他の社会に対して自己を主張することができ、またその意味で生き残ることができる、確信するものである。

実際、古代社会の大海原の中では小さな島々のように見える少数のキリスト教社会は、進んで新しき者（回心者）をつくり出すとうとしていた。彼らは、聖パウロが書簡に書いた言葉を新たに想起していた。

すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、心の一霊まで新たにし、真の

義と聖にて神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。(エペソ人への手紙 4. 22—24)

初期キリスト教社会がキリスト教の教義に加えた重要性は、彼らが新しい人間、即ちもう一つの存在、を造ろうとは考えなかったことから出ている。むしろ彼らは、義にして真実の人間という意味での新しい人間を造ろうと固く決意していたのである。初期キリスト教社会にとってキリスト教の教義は真理そのものだった。なぜなら、神と世界と人間の関係という最も重要な見地から、宇宙の一部として存在する物すべてが何であるかという問いに対する答えをそこから得たからである。

キリスト教社会にとって、「真理」の意味は、たぶん代金を払って教えてもらったり考えたりするものではなかった。古代の多くの遊行哲学者たちがそれをしていたのであるが。真理の第一の意味は、聖パウロが勧めるように、実践によって実現するものである。

こういうわけだから、あなたがたは偽りを捨てて、おのおの隣の人に対して、真理を語りなさい。……今後、盗んではならない。むしろ、貧しい人々に分け与えるようになるために、自分の手で正しい働きをなさい。……互いに情深く、あわれみ深い者となり、……(エペソ人への手紙 4. 25—32)

キリスト教社会の考えでは、「真理」の意味は日々の生活における義なる行いである。この点において、彼らは周囲の社会、と

りわけ多くの哲学諸派や遊行哲学者とは異なる。彼らは、思想と行動を一致させようと、また彼らにとって真理であるキリスト教の教義に従って生きようとするために努力をする。彼らは理想的な人間について考えない、彼らは、自分自身の中に新しい人間(回心者)を実現しようとするのである。

福音書の著者・聖ヨハネはイエスを「真理(ロゴス)」として特徴付けることでヘレニズム哲学のキーワードを使い、一種の哲学批判を為して次のように言わんとしている。人生において完全に真理に目覚めた者は、そのように行為することで神の子である。なぜなら神と真理はひとつなのだから。使徒・聖パウロはキリスト教の教義を「知(ソフィア)」と特徴付けることでヘレニズム哲学のいまひとつのキーワードを使い、次のような批判的意味を持たせている。キリスト教教義は哲学と違って真知としてのポーズをとるために迎合したりしない。その真理によって新しい者になるために、それを真理として受け容れる者たちが要求する場面に真知である。

実践のための知識としての真理というキリスト教的概念は、理論的分野においてさえ重要な社会的重要性を含んでいる。古典時代の哲学派や哲学者たちは哲学を、もっぱら教育を誇示することに関心のあるインテリ市民のためであると見なしていた。しかしながらキリスト教会は教義をすべての人々のためであると理解して、そのために普通の人々が自分たちのために近づくようにしな

ければならなかったし、またそのように保った。だから彼らはストア派のように——社会的にも論理的にも——人々の間に基本的な相違を認めなかった。そのうえ、真理を開示することを義務と見なしている。彼らの考えによれば真理は神によつて聖書に啓示されており、誰にも——教育なき遠域の人たちにさえ——見られるようになっていく。だから大変早くから信条は理解しやすいため、文章で聖書の本質を説明しているのである。それに通じていなければ誰も受洗しないだろう。回心をしっかりと決意した人々から成るすべてのキリスト者の実践的意識は、理論的基礎に一種のドグマ的意識、言い換えると真理意識を持っている。

2 カロリング朝のキリスト教と修道院制度

西暦八〇〇年のクリスマスに教皇レオ三世（七九五—八一六）はフランク王チャールズ（カール大帝Ⅱシャルルマーニュ）を戴冠させた（七七八—八一四）。彼は後世「偉大なる」と称号される。この行いでローマ帝国は再び築かれた。民族移動の混乱で途絶えていたのである。新ローマ帝国は、キリスト教を国教と宣言したテオドシウス帝（三七九—三九五）の伝統を継ぐものと理解していた。チャールズ大帝はキリスト教帝国のみ真の帝国と考えた。しかし彼の帝国とテオドシウスの帝国にはひとつの重要な相違があった。今や帝国の政治的主体はフランク人で、もはやローマ人ではない。だからキリスト教帝国を支配するのは表面上キリスト教

に改宗した人々に代わった。実際いくつかの理由でフランク人がキリスト者になるには困難があった。まず彼らの文化的伝統がキリスト教の伝統と似ていないということ、次に西方のキリスト教の言葉であるラテン語が彼らの言語ではないということ、最後に、すべてのゲルマン民族がそうであるように彼らは口誦文化にのみ慣れていたことである。だからもしラテン語支配に従っていた上流階級でなければ、聖書や他のキリスト教書を読むことができなかった。ましてや普通の人々は完全に読めなかった。だからチャールズ大帝は次の問題を解決しなければならなかった。どうしたらラテン語に無案内なフランク人のような人々が、何よりも自分たちとキリスト者と自覚することによつてキリスト教帝国を受け容れ認容することができるようになるか、と。

チャールズが見付けた解決法は天才的ひらめきによるものだった。彼は、修道院が元来反政治的といわれないまでも彼なりに非政治的だったのを、政治的な仕事を引き受けさせることに成功した。世俗的生活から退くことで、すべての僧侶生活がそうであるようにキリスト教の僧侶生活も成るのであるが、しかし後者はキリスト教修道院の中にのみ真理、つまりキリスト教教義に基づく回心者になることが必要であることがわかる状況があると論じていたものである。このキリスト教僧侶の考えはチャールズ大帝に賢明に発展させられた。彼は論じた。回心者のために僧侶が真理に奉仕するのは、ラテン語の読み書きを学ぶことにある。この能力に

よつてのみ真理を聖書から正しく完全に収集することができ、そのようにして収集した真理をすべての民族に彼らの言葉で説かれれば、帝国の人民は誰でも回心することができよう。キリスト教修道院の概念をそのように拡張すると、回心者のために、世俗生活から隠退することを止めておくことになるだろう。政治的にそのことを正統化させよう。その結果は、その任務を引き受け遂行することで修道院の一種の社会的リハビリテーションにもなるだろう、と。

やがてカロリング朝の修道院がチャールズの方針に従つてそのことを理解したのは一驚である。修道院は以前の機能に加えて、いよいよ教育機関になつていった。辛抱強く熱心に僧侶たちは、皆に説教できるように聖書から全真理を集めるように努力した。キリスト教国の普通の人々を回心させるのに他の道をとらなかつた。従つて僧侶たちは、特に人民の倫理的な生活のために、それを理解させる中世の社会階層になり、必要とされた学校教育にも努力した。反比例して哲学派や古典学の同様の学派は全く私的なものになつていった。人々はそれを一種の余暇事業と見なし、私的な目標は連帯してよく成し遂げるものと確信した。中世以来、少なくともチャールズ大帝以来、学ぶことは公共の利益つまり全社会的利益になることと理解され、中世の教育機関は、修道院付属学校から大学に至るまで、公権力によつて推進されるものになつた。これらの機関は伝道や法律や医学のエリートをつくり出してい

た。彼らは自分の専門職業がすべての人々に奉仕するものと理解した。

3 中世の学問とキリスト教

修道院は幾多の学校を設立した。そのカリキュラムとして、古代後期にさかのぼり、七つの学芸——古典期には奴隷に対して自由民を区分けする理論的資格であつたのだが——それをモデルにした新たな履修要目を作り上げた。中世の学問では、まず初めに学生は読み書きとラテン語、それに臨時祝祭日のための暦の計算の仕方とを学び、それから第二段階として、聖書から真理を収集する方法を学んだのである。そのようにしてその学生は礼拝で仲間のキリスト教徒に真理を説くことができるようになったのである。教会に関する、つまり文化的なことに関するチャールズ王の右腕であつたアルフィン（七三〇—八〇四）は、この七つの学芸を統合して「哲学 (philosophia)」と名付けた。それ以来修道院の学校では、哲学はもっぱら真理の殿堂である聖書へと導く七つの階梯として理解された。この比喩的な言い方で、中世を通じて学問が定められるパターンを表現した。哲学 (philosophia) は神学 (theologia) のために学ばれる。現代風な言い方をすれば、学問は真理のために必要、ということである。

まもなく教師は次のような問題に直面することになる。聖書を説明する際に、それまで正しい方法を用いてきたかどうかを、一

体いかなる基準で知ることができるのか。この問いとともに、教師は真理の認識という中世の根本的な問題にも直面することになったのである。それは、真理とは何かというのではない。そして、その問いは答えられたと見なされた。中世には、人々は聖書を持つことに真理があると確信していた。ただそれは比喩的な言葉で表されているが、だから、真理を正しく解説することが教師の第一の、そして最も重要な仕事だったのである。それゆえ、真理の認識という根本的な問題は、中世ではもっぱら方法に関するもの、すなわち、聖書からどのようにして真理を正しく収集してゆくか、ということであった。

このことに対する解答は早くも九世紀には与えられ、中世を通じて変化することはなかった。その解答とは、科学的に進めるということである。それでもって、中世の学問は、真理の認識という根本的な問いに対するひとつの答えを知らず知らずのうちに与えていたが、実際にはそれは解答ではなかった。中世に学問が発展するにつれ、初めの確信とは裏腹に、「科学的に進める」ということの正確な意味が明らかではなかった。学者がこの問題に最終的な解答を得ていると確信を得るに至った時、まさにこの解答によって科学的に到達しようと思われた目標が、科学的に不可能だということを、信するべく迫られたのである。

中世の科学の進歩の悲劇的な運命について概観してみよう。科学的に進めるという方法で聖書から真理を収集するということは、

最初は聖書を初期の教父たちによって与えられた解釈を用いて、逐語的に説明することを意味していた。この方法の代表的な者は、ペダ（六七〇—三七三五）、アルカイン、それにフラカン（七八〇—八五六）である。

しかし、初期の教父たちの解釈を読んだ学者は、大変驚いたことに論理的に相容れない解釈がたくさんあることを発見したのである。それ以来、「科学的に進める」ということは、聖書を論理的に一貫性のあるように説明することとなった。この方法によって、学者は、聖書の比喩的な言い回しを解説し、彼らが見つけた証跡を概念的な言葉に翻訳するだけでなく、真理を真理たらしめる命題体系として述べるのが義務となったのである。それゆえ、明白な概念からなる矛盾しない命題体系として学者が述べるなら、正しく述べられた真理に達する。この種の方法による代表的な人物がスコットランドのヨハネ（八一〇—八七〇）、カンタベリーのアンセルムス（一〇三三—一一〇八）、それにアブラールのベトルス（一〇七九—一一四二）であった。

その方法を用いた解釈家は、まもなく次の問題に直面することになった。すなわち、聖書の各伝は、内容と形態の点で互いに一致しない。ではどのようにそれら諸伝から正しく収集したらよいのか、という問題である。一二世紀以降、学者はこの問題の解答がロンバルドゥスのベトルス（一〇九五—一一六〇）の『命題集』にあると確信した。人類の救済の歴史、すなわち、創造、人類の

墮落、贖罪、復活、そして永遠の至福、という観点のもとに、ロンバルドゥスは初期の神父たちの作品から集めた重要な金言の体系を組み立てていた。そこで、一三世紀からは、聖書はもはや学者が真理を引き出す根本資料ではなくなった。ペトルス・ロンバルドゥスの体系的ではあるが完全には一貫性があるとはいえない、典型的な聖書解釈書が、いまや根本資料となったのである。聖書は、次第に中世の学問の背景の中に隠れていったのである。

この方法的転換にすぐ続いて、中世の学者たちは、アリストテレス（BC三八四—三二三）の科学概念を発見した。そして、彼らがその概念に精通するようになればなるほど、次のことを認めざるをえなくなってきた。すなわち、ペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』を説明することが、聖書に内在する真理を得る正しい方法とはならないだろうということである。アリストテレスの科学概念によれば、諸命題の体系のみが科学的なものでありうるが、それはユークリッドが『幾何学』で実行したように、厳密に論理的な操作によって、最初の公理的命題から引き出すものである。科学についてアリストテレスは、中世の学問世界においては、真理に関して聖書と同等の評価を受けていた。それゆえ、学者たちは以来ずっとアリストテレスの科学概念に科学の最終的な概念があると確信することによって正当化できると考えた。

その確信によって中世の学者たちは、予期せぬ次のような問題に直面した。すなわち、キリスト教の教義は、信仰の知識である。

この種の知識は、明白な最初の諸命題の基礎にはなりえない。しかし他方では、キリスト教の教義は真理である。それゆえ、科学的に言うならば、それは明白な諸原理から引き出されなければならない。キリスト教の信条のどの文言がそうした原理として正しく役立つであろうか。

アウクスレリウスのウィリアム（一二三二—七没）は、この問題に次のように答えた。科学的に述べられた真理の体系は、信条の命題から引き出される。トマス・アクィナス（一二二四—一二七五）とドゥンス・スコトゥス（一二六五—一三〇八）は、この決定を次の議論によって正当化した。確かに信条の命題は、人間にはわかりにくい。しかし、それらは著者である神にとっては明白である。

そのため、それらを明白な命題として用いることが許される。なぜなら、神によって信条の命題が人類に啓示されたからである。この論議によって、真理の体系が——公理的——演繹の体系として維持されるようになった。これは当時科学的に叙述された命題体系を意味したが、この体系は誰にも理解できるものであった。明白ではなかった最初の原理を捨てている。しかし議決において選ばれた。それゆえ直接理解しうるものではない。それらは、真理であると信じられなければならないのである。

科学的に真理を述べるということについてウィリアム・オッカム（一二九〇—一三五〇）は次のような結論を引き出した。聖書か

ら引き出した命題やロンバルドゥスの『命題集』が真理であると主張することは許されない。なぜなら信条命題から結論を引き出す方法は科学の概念に合致しないからである。真理ということからすると、その種の命題は非科学的である。真理を見たい者にとっての出発点は、啓示即ち聖書ではない。彼らは前提になつていゝ、いかなる素材真理をも捨てなければならぬ。そして誰にも明白で直接理解できる認識から出発しなければならぬ、と。

オッカムの結論で、中世の学問は理論的生命に関する限り結論を迎えた。けれども実定的存在が未だだった。その伝統的概念は科学的には不可能となつた。中世の学問はそれを、科学的な勝利と見なした。伝統的な考えは存在理由をなくしたのである。その理由とは、聖書には少なくとも比喩的な言葉で真理が述べられているという確信だった。真理は、もし明瞭な概念の言葉に翻訳され正しい体系的秩序のもとに並べられれば、自らの適切な形を見出しただろう。だから誰にも理解ができたであろう。しかしこのことを達成しようとする中世の学問的努力はすべて逆の結果を導いてしまった。つまり次のような確信になつてしまった。

神と人と世界の全知識としての真理を科学的な形で得たいと願う者にとつては、キリスト教教義からそれを予想するのは誤つてゐる。正しく努力して二つの要件を満たさなければならぬ。彼はいかなる独断論的偏見も持たず、人間の活動経験からのみそれを進めなければならない。従つて中世の学問と同じように真理に

ついて関心をもつ近代の学問は、それを基礎として真理の概念を進めなければならないだろう。真理を科学的に述べる前に、それを見出さなければならない。なぜなら科学的に真理を求めるとキリスト教教義を神に啓示された真理と見ることは今や相互に背反するのである。

4 近代哲学とキリスト教

真理を探究する近代の学問世界は次の問題に直面した。即ち、すべての材料となる仮説を捨て、ただ人間の経験からのみ始めることにより、いかにして真理を正しくつかむことができ、真理だと断定できるのかという問題である。この問いはすぐに十分明瞭なものではなくなつた。経験という語は二つの異なるものを表しうる。ひとつには、人間が五感によつて、即ち知覚することによつてできる実在へのアプローチを意味する。

この曖昧さのために、近代の学問世界は一番最初から二つの相反する傾向、つまり経験主義と合理主義で形成された。前者はトーマス・ホッブス（一五八八—一六七九）によつて創設され、後者はルネ・デカルト（一五九六—一六五〇）によつて創設された。この二者のうちどちらかを支持する者たちはそれぞれ真理の科学的探求に出された問題に正しい答えができると確信していた。

経験主義者によれば、経験とは、真理の科学的探求は我々が五感でつかむ実在に関する知識から始めねばならないことを意味す

る。なぜなら、この種の知覚のみが正しいか正しくないかを調べられるからである。従って、客観的な認識はもっぱら感覚的世界だけにできうるものである。しかし、神も世界も人としての人間も感覚的なものではない。それゆえ、それらのいかなる客観的認識も全く不可能である。経験主義は、その結果、オッカムの神と世界と人間に関する命題を、この見解をもつ人たちが真実と考える信念の表現であると定義している。さて、どの社会も、他の社会に対して自らを固有のものとして主張して、その意味で生き残っていくために、全く同一のものである神と世界と人間についての信念を必要とする。それゆえに、統治者は、どの信念がこの見地からして最も適切であるか、どの信念がそれゆえすべての共同体によって真理と見なさなければならないのか、それでどの信念が生活を営むことの基礎であるのにふさわしいかを決定しなければならない。

このようにして、経験主義者は、キリスト教の伝統によって二様になった。経験主義では同質の社会はひとつの共通の宗教のものでのみ存在しうる、そして伝統という理由から、キリスト教が一番ふさわしい宗教であるという見解をもつ。そして経験主義者は、キリスト教の教義が真理であるという、いかなる科学的論証も不可能であるとの信念を中世末の学者たちと共有した。科学的真理の探求は感覚世界の客観的認識に限定しなければならぬ。それと反対に合理主義者にとって経験とは次のことであった。

科学的真理の探求は、五感のすべての影響を排除してしまつたから、精神によって得る実在についての知識から始めなければならない。従って、考える生物としての人間が、すべての真理の探求に向かう出発点としてとらえられてきている。そして本来は人間の意識の中にもともと存在する内容と調和を求めて人間の意識を分析することが、合理主義的伝統では真理への道になっている。分析は公理的演繹的方法にしたがって行われるから、この方法は科学的である。

そこでデカルトは「われ思惟す、ゆえに我あり」という推理がただひとつ確実な命題であつて、それはある実質的なものを表し、数学的命題や論理的命題のように全くの形式的なものではないと発見した。さらにこの命題はそれを聞くすべての人に直ちに理解される。原則としてこの命題から出発し、デカルトは、誰に人間がその存在の可能なことを負うているかを追究した。永遠の实体が原因とされなければならない、そして原因は人間よりもっと完全な存在者と考へなければならぬ、それは正しく用いられれば、人間に真理をつかめる精神を授けるものであると彼は答へた。それは数学的な正確さでその対象を表現するすべての命題に正しく使われている。

経験主義と同じように、合理主義も、均質の社会というのはキリスト教の教理によって伝えられた神と世界と人間に関する真理をもとにしてのみ可能であるという信念をキリスト教に負うてい

る。しかし経験主義に反して、合理主義はまた科学的にもその真理を見付けだし、いかなる独断論的偏見——キリスト教の偏見すら——持たずに、ただ科学的方法に従って、人間の経験からのみ始めることができることを確信している。デカルトは、従って神学に真理を認識する能力があることを拒絶し、その能力を哲学に与えた。なぜなら哲学は偏見なしに進められるからである。これが現代において哲学がもつ高い社会的敬意の所以である。

人間の意識に関する哲学の代表的な近代の伝統は、形而上学が科学的学問分野でありうることを確信することで、さらにキリスト教に恩恵を受けている。現代をとおしてずっと、合理主義はいつも神が世界と人間の創造者であると科学的に考えられるようにし、そしてそれゆえ、神の存在を誰にでもわかりやすい方法で述べるようにするという野心的目標を追い求めてきた。それとは反対に、経験主義者は、形而上学が科学的分野としてはあり得ないと主張してきている。従って、形而上学が科学的分野でありうるかあり得ないかについての論争が近代哲学の中心テーマとなってきた。

この論題に関して、一番最近の論争、つまり、ハーバーマス（一九二九）とヘンリッヒ（一九二七）との論争がふたつの重要な結果をもたらした。中世の後半以来正しいと認められ、それゆえ、科学においてもっぱら公理的演繹の方法が妥当であることに責任を負うべきアリストテレス哲学の概念は正規の学問分野のみ、即

ち、数学と論理学に妥当であると考えられなければならない。この結果は論議された問題に重要な影響を持っている。経験主義の学問分野の科学的特性として、例えば、物理学は仮定の命題が出发点であるということに損なわれるものではない。なぜなら、これらの学問分野においても、最初の確かな命題はないのであり、また形而上学においても、もし次の二つの条件を満たせば、あてはまることであるから。つまり形而上学もまた明らかにその原理が仮定の命題であると断定しなければならぬ。そして形而上学も明確に、その成果を神と世界と人間の理論であると断言したり、真理であると断言してはならない。

第二の結果は、第一の結果からヘンリッヒによって導き出された帰結である。自らを可能な真理についての科学的な理論である、と見なす形而上学はいかなるものであれ、次の課題を自らに課さなければならない。

(1) 他の社会に対して自らの存在を主張し、またその意味で存続できるようにするために、社会は実際に真理を必要とするか否かを、形而上学が調べること。

(2) もし、これとの関係で見出される議論の大勢が真理を必要とすることに對する賛成票であると必然的に見なされるならば、真理は通常、社会にいかなる形で必要とされるのか、科学で用いられる概念的言語、すなわち、明確な概念から成る命題体系という形でなのか、あるいは宗教特有の比喩言語、

すなわち、神話としてなのかを形而上学が調べることに。

(3) これとの関係で見出される議論の大勢は、おそらく宗教特有的の比喩言語上の真理に対する賛成票と見なさざるを得ないだろうが、それはとりわけ、正しい処世上の真理を考える宗教は、必然的に思考を通じてというよりは、むしろ体験的という形で真理を提供するという理由からである。とすると、それ自身の文化的複合体のもっている複数の宗教のうちのみならず、この特定の社会として他の社会に対して存在を主張し、その意味で存続の可能性を社会に提供するのに一番適しているかを形而上学が調べることに。

経験主義と合理主義の間の論争点——すなわち、真理は科学的に認識されるか否かという問題——に関しては、ヘンリッヒは経験主義的伝統と合理主義的伝統との双方から、統合論を導き出しており、それは将来性のあるものになっている。その統合論とは、ある特定の社会の存在主張のためには、いずれの世界観が真理追究のために採られるべきか、従ってどれが生きる行為の基礎となるべきかを、定めて確定されなければならないとする。だがこの決定は統治者によって為されるのではなく、共同体の学問世界によって、共同体全体に勧めなければならない。従って、勧める時の決定基準は誰にでも理解できるものでなければならぬし、また絶えず、科学的批判に対して開放されていなければならない。我が欧州社会では、歴史的な流れから見れば結局、欧州の存在主

張と存続の目的に適しているか否かが問われなければならないのは、キリスト教的世界観である。だから近代の学問史上初めてキリスト教の教義が、全く科学的な必要性だけで真理の科学的な探究のテーマとなるのである。もしこれに関連し見出される議論の大勢が、必然的にキリスト教の教義に関する賛成票と見なされるものであれば、現代欧州学会は当然それを、科学的に正しい基礎として採用するよう欧州社会全体に勧めなければならない。このようにして、現代欧州学会にとつては、キリスト教の教義は科学的に見て順当な真理探究の基礎となっているのである。

欧州学会にとつて、欧州社会をキリスト教社会として理解することが再び許されたという意味を持つのであるが、もはや、中世とは異なり、神と世界と人間についての真理を有する社会としてではないということである。いまや欧州社会は、キリスト教の教義、神と世界と人間についての真理を実践的にまた理論的に求めている社会として自身を理解しなければならないのである。欧州学会にとつての結論は、真理の追究とは、今では人間と神と世界について最も適した理論を求めているという形を採ることである。

(フルダ神学大学副学長)

〔この発題論文の翻訳は、四天王寺国際仏教大学の三浦伊都枝、木村俊彦、高橋孝信、大関雅弘、原田保、村上光久の協力によるものです。〕